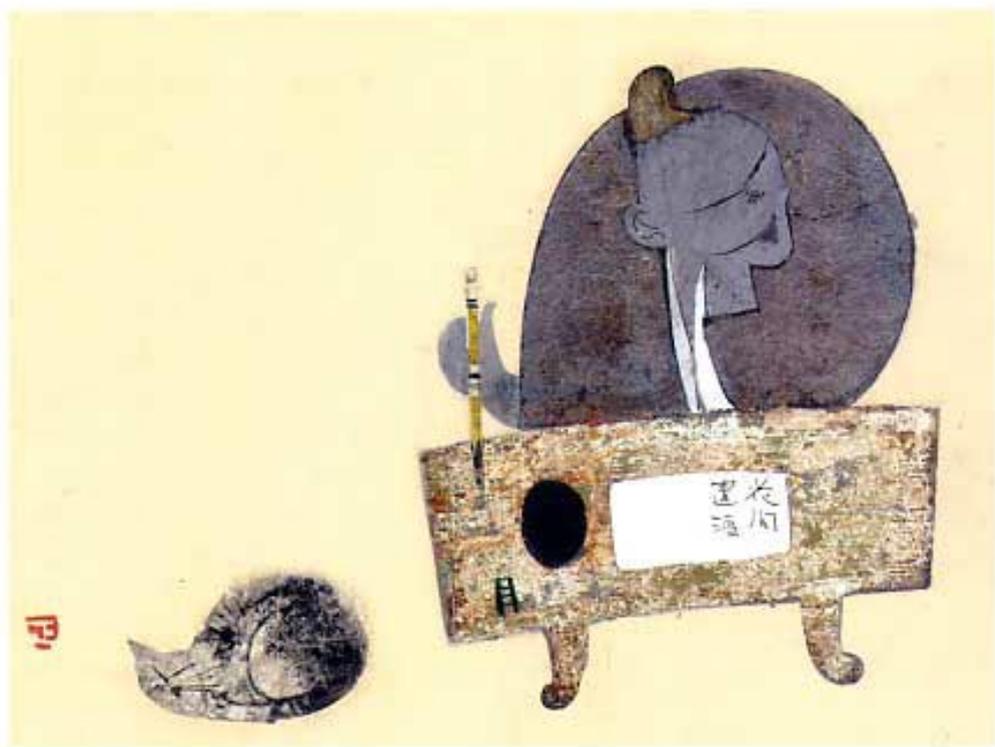


火星



平成20年11月号

七曜抄 (五)

山尾玉藻

橋守の昼酒に降る緋連雀

橋立を渡りきし貌秋さぶる

舟屋より舟屋見てゐる秋の昼

パラソルの内の草ぐさ実をもてり

伊根人の灯火低し望の潮

草虱つけて沖見るふたりかな

括りあるものの影あり月の畑

僧坊の大きシャベルに鴟猛る

古傷も生傷もあるくわりんの実

蘆刈の休める顔がこちら向く

太白星

柳生千枝子

蚯蚓鳴く真夜の鏡に独り居て
蚯蚓鳴く雨戸の外に月照るか
蚯蚓鳴く独りに馴れしわが晩年
新しく水を満たして新豆腐
紅色の淡きコスモス選びをり
色淡き深夜の月を見て寝ねし
芋嵐見守つてゐる眼が優し

杉浦典子

銀漢やデッキブラシの立つてをり
甲板を素足で踏める天の川

山のもの刻めり盆の月のぼる
芋殻箸と銀のスプーン添へにけり
井戸神さん祀るおしろい咲きにけり
嵌めころしの窓の向うの稲光
母牛のねむりに入りし天の川

浜口高子

喪歸りの袖夕顔に触れしなり
夕顔や手作り木椅子軋みたる
てのひらの蟻蛭発ちたる窪みかな
盆過ぎの艫が舷を打ちぬたり
子等見送る風のふくべの鳴りしなり
きちきちのとび出しにけり合戦図
稲妻を浴びし仁王の草鞋かな

火星作品

山尾玉藻選

盆道を前髪濡らし戻りけり
八幡 大山 文子
生ぬるき雨の降りをり七日盆
山車小屋に錠のいろいろ秋暑し
秋暑し蚕部屋にかかる段梯子
鯉炊に酒屋の一升秋暑し
夕焼の体育館のがらんどう
蘭定かず子
東塔は雨後の日差しに秋つばめ
腹這ひの畳の白し盆の月
地をきざむやうに進みぬ阿波をどり
歩道橋を帰ってゆける踊笠
はらからの会話短し夜の蟬
明石 戸栗 末廣
青葉木菟一山の闇払ひけり
日 の 暮 の 波 音 近 し 魂 迎

夕顔や水にむせたる鳥骨鶏
八朔の風にしたがつ山の草
男ばかりのアルプススタンド灼けてをり
水底を伸びる葦の根秋旱
渡り鳥本のポストへ本落す
露おいてしばみ遅れし月見草
生ぬるき川風あがる送り舟
草紅葉して銀山の行き止り
ぼつねんと上座に居られ盆の月
八朔の影置く人を石切場
禰宜さんが合羽召さるる雁渡
ちよつと覗きし隣室の竹婦人
水中り善男善女に紛れけり
百歳の生見魂なる箸遣ひ
夕顔を数ふる母の忌なりけり
八朔や頼母子講の灯の洩るる
地藏会の草叢削りをりにけり

兵庫 深澤 鱻

山田美恵子

宝塚 河崎 尚子

選のあとに

山尾 玉藻

盆路を前髪濡らし戻りけり

大山 文子

「盆路」とは盆用意の一つで、精霊が迷わず家に戻ってこられるように、山墓から里への道草を刈り整えた道のことである。まだ涼しい明け方より行う作業であり、山道の草ぐさは夜来の露を美しく結んでいる。「前髪濡らし」とは、決して汗の所為などではない。前屈みで一心に草を刈っていて、前髪が草ぐさの露に触れてしっとり濡れてしまったのである。女性にしか詠めない「盆路」の一句として、大いに共感を覚える。因みに、精霊が魂棚に戻られて空っぽになつた筈のお墓にどうしてお参りするの、それは生前不品行を重ね面目なくて家に戻れない精霊さんを慰めに行く為、らしい。

地をきざむやうに進みぬ阿波をどり

蘭定かず子

「阿波をどり」の男踊も女踊も、足袋や下駄のつま先をやや外輪にして中央に据えながら、小刻みに進んでゆく。軽い足捌きと言うよりは、つま先で喜びをにじり込めてゆくような動きで、なかなか妙味がある。掲句、「地をきざむやうに進みぬ」との見立ては、そんな独特の足の動きを言い得て妙、大いに納得させられる。

八朔の風にしたがふ山の草
八朔の影置く人を石切場

戸栗 末廣
山田美恵子

農繁期も過ぎた陰曆八月朔日もなると田圃の稲穂も熟し始める。しかし同時に、稲に大きな被害を与える台風が到来する頃でもある。農家では期待と不安の気持をこめて祈願の行事も色々行われるが、結局は大自然の成り行きを静かに見守るしか手はないようである。自ずと季語「八朔」にも、穏かさの中にどこか張つた静謐さが漂う趣がある。

一句目、この趣に「風にしたがふ山の草」の静かな情景が見事にマッチしている。殊に、何処かに不安感を忍ばせる「したがふ」の表現が「八朔」にある微妙さに適っている。

二句目、白々とした「石切場」にぼつんと人影がある景にはどこか緊張感があり、これも「八朔」の趣に通じるものである。中七までのやや重くれた表現もまた微妙さを生んだ。

露おいてしばみ遅れし月見草

河崎 尚子

日暮に開花し翌日の日中にしばんでしまうのが「月見草」であり・すぐに「しばむ」という儂さが「月見草」の「月見草」たる所以であるのだろう。だからこそ作者には、日中にあつてまだ咲き続けている「月見草」が却つて衰れに思われ、「露」さえ結んでいる健気さに一層その思いを深くしたのである。「月見草」の本来の有り様に拘つた「しばみ遅れし」の措辞の妙味を味わいたい。(以下略)

恒星圈

吉田島江

打水に立ち止まりたる雪駄履
ブロッコリーに塩ひと振す残暑かな
新茶の香机上に満ちて宇治十帖
玉虫と遊び服薬忘れけり
初盆の寺の板の間きしみけり

山田美恵子

吉田康子

父を追ひ母の小走り豊の秋
十六夜の明るさにゐて声がすれ
星合の露しづくする弓の的
糠床に塩たす燕帰る頃
灯の数の湖面にならぶ盆の唄

打水の門前町のごま豆腐
香久山や藺草干されし高曇
竿のものすぐに乾きぬきりぎりす
水打つて妻籠の灯りゆらぎけり
崖の修験者堂に百合咲けり

山本耀子

米澤光子

産毛びつしり逆光の青ふくべ
秋扇帯に越後の酒たまふ
みんみんに味噌樽の箍ゆるびゆく
草の市越後の味噌を手のひらに
芋殻の煙築地松より滲み出せり

きしきしと砂踏みゆけり天の河
ひぐらしや近江の絵馬の混み合へる
殿には蹤かぬつもりの日日傘
星流る賽銭箱のからころと
蟻のぼる彫ふかぶかと特攻碑

獅子座

山尾玉藻推薦

奥田順子

仏間の灯けふあかるかり青瓢
草の市三河訛でかへしけり
ことしまた初ひぐらしをおとうと
抱きしめて父のぬくとし月の椅子

松山直美

モノレールより大西日さす我が家
かなかなや返却本を脇抱へ
枝豆を食ひ競ふも夏休
リピングに蟻蛸放ちて躓けり

西畑敦子

蟻螂のホースの水に構へけり
未成りの西瓜の柄のきちやうめん
本堂の開け放ちあり盆踊
盆唄のこゑを限りと弥陀の庭

松井倫子

日盛や五本筋堀剥れあり
溶岩跡に断たれし道や赤蜻蛉
雪隠に杉の香満ちぬ秋ひでり
車椅子に屈める影の良夜かな

白数康弘

手囿ひをして流灯に灯を入れぬ
波にゆらぎて流灯の灯のたしか
流灯会うしろ女の息づかひ
与謝の闇あればや燃ゆる送り舟

渡邊美保

はらからの寄れる仏間へ秋の蝶
平畝のかぼちやに翅の音繁し
干網に鱗乾びるつくづくし
新涼や地下街に聞く水の音

緒方佳子

高原の夏掛厚き目覚めなり
船渡御の灯に白蒸しの蓋とりぬ
頬ゆたかななる太子画図涼しかり
高原のバス停八月十五日